

# 世界の子どもたち

本シリーズは、フォトグラファー中西あゆみさんが  
「世界の子どもの生活とあそびの今」をタイムリーにレポートします。

写真・文 中西あゆみ



インドネシア

## 都市開発

経済発展が著しいインドネシアの首都ジャカルタでは建設ラッシュが止まりません。オフィスビル、高層マンション、コンベンションセンターから各国既存大使館の新建設にいたるまで、あちこちで日夜作業が進行しています。増加を続ける中間所得層の消費を期待し、とくに続々と造られたショッピングモール。東京都の約 $\frac{1}{3}$ にあたる同市の面積に、現在その数170以上。ここ数年で世界でも有数のモール過密都市となりました。新しいモールの内容は似たりよつたり。隣同士のモール内に同じブランドが入店しているケースもよく見られます。

多くの人の年収が日本の平均月収以下ですが、物価は上昇しています。モール内の価格設定は日本と変わりません。中流層が増えているとは言え、一般庶民が毎日買い物を楽しめる場所では決してありません。実際、週末は若者や家族連れで賑わいをみせるモールも、平日は閑散としています。あまりに増えすぎたため、昨年ついにジョコウィ州知事が今後のモール建設中止命令を下しました。幹線道路沿い数キロ毎に立ち並ぶ巨大モールの姿は、一見近代



1

**1.**開発予定地となっている空き地で凧あげをする子どもたち。南ジャカルタ。**2.**高級ショッピングモール内の子ども用ミニ遊園地。中央ジャカルタ。**3.**子どもを乗せ、近所を一周する「オドン・オドン」。南ジャカルタ。**4.**高層住宅の共用敷地内では、日が暮れてもサッカーを続けることができる。南ジャカルタ。**5.**ジュースを飲みながら、空に舞う凧同士の戦いを見つめる子どもたち。南ジャカルタ。**6.**平日の午後、学校には行かずにオートバイ修理店で働く少年。南ジャカルタ。

都市の豊かな雰囲気を醸し出しています。一方、周囲のインフラは整備されず、渋滞や公害は悪化。裏手には、低所得層が暮らす村が広がり、政策の優先順位に疑問をもつ市民もいます。

ジャカルタには公共の公園が少なく、大規模な開発によって子どもたちの居場所が減少しています。最近では、子ども専用の乗り物「オトン・オドン」が人気です。あそび場が少ない子どもたちのため、住宅街の狭い道を出発、表通りに出で近所を一周して戻って来ます。乗車時間は20~30分。料金は一回2万ルピア(約200円)。お母さんやおじいさん、おばさんと一緒に束の間のドライブを楽しみます。

平日の夕方、南ジャカルタの広大な開発予定地の空にはたくさんの凧があがっています。「ラヤン・ラヤン」と呼ばれる凧あげを楽しむ子どもたち。空の上で凧をぶつけ合い、他の凧を落としたら勝ちです。負けて地に落ちた凧は誰でもタダでもらって良いというルールがあります。一つ2万ルピアの凧を買ふことができない子どもたちが、落ちて来る凧をめがけて走ります。

一方、高級ショッピングセンター内に設けられた子ども用のミニ遊園地で週末を過ごす子どもたちもいます。乗り物は一回1万5千ルピア(約150円)と比較的高額なため、ここで遊ぶことができる子どもは限られています。

近所に遊び場が減っても、人工的に用意されるあそび環境は何もかも有料です。放課後、子どもたちが地域をまたいでわざわざ遊びに出かけることはあまりありません。親やメイドが子どもを習い事に連れて行くことはあります。しかし、歩道の未整備や異常な渋滞、経済的な理由などで現実的に移動が難しいことから、多くの子どもたちは、近所で、できる限りのことをします。他の子どもたちが遊んでいる時間に、労働している子もいます。政府はこれまで、子どもにとつてより住みやすい環境づくりよりも都

市開発を優先させて来ました。そ

の結果、各家庭の経済事情が、子どもたちの置かれる環境のすべてを左



©Sameer Al-Abdullah

### 中西あゆみ

フォトグラファー

東京出身。米国でフォトジャーナリズムを学ぶ。2010年よりインドネシアのジャカルタを拠点に活動。長編ドキュメンタリー映画を作成中。



4



5



6



2



3